九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日原利国著『春秋公羊伝の研究』

田中，麻紗巳

https://doi.org/10.15017/18041

出版情報：中国哲学論集. 2, pp.72-79, 1976-10-01. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

書評

日原利国著『春秋公羊伝の研究』

田中麻紗巳

本書は、漢代思想の研究で多くの業績を挙げられている著者が、漢代公羊学の源に遡って、『春秋公羊伝』そのものを対象とした研究の成果である。そこでまず初めに、七つの項目から成る本書の内容を、その項目の順に簡単に紹介しつつ、論究の特色や疑問点などを指摘していき、次に全体にわたる事柄などに触れることにする。

「一　春秋学の成立」は本書における序論の位置を占める。二節から成るその初めの「春秋および春秋学」では、従来の説に依って、魯の年代記に過ぎぬ『春秋』が『孟子』により孔子と結びつけられるが、まだ『孟子』では孔子が『春秋』を著述しそこに微言大義が存するとはされず、荀子に至って経に昇格されて微言大義が認められ、『韓非子』で孔子著作説が確立する、と説く。ここでは『孟子』の「孔子懼作春秋」（滕文公下）の「作」が著作ではなく講説の意であるとする馮友蘭氏等の解釈を、『孟子』の文章の構成と訓詁に基づき詳細に証明した個所が目を引く。孟子は、孔子が『春秋』について弁論をふるった、といっただけであることが納得させられる。次節の「公羊伝の成立と伝文の特異性」では、『荀子』大略篇の頃に『公羊伝』の体裁がほぼ整っていて、前漢景帝期に胡毋生により「竹帛に著け」られたと理解されること、その書物化された『公羊伝』の内容（伝義）は、中核をなす基本的見解に後次の補充が加わっていて、つまり伝の伝を含んでいて、長期にわたって累層的に形成されたと考えられること、伝文に斉語が多いことなど、従来の解釈を要約して述べる。更に『公羊伝』の特異性の一つとして訓詁学的な伝文の混在に触れ、筆法や礼制にかかわる重要なものの他に単なる字書的な訓詁の存する意味を考えている。もともと礼・楽は実習により伝授されるものだが、『詩』『書』は内容を理解する為の訓詁の書を必要としたので『爾雅』が編まれ、『易』では十翼中に説卦・雑卦伝を含むことでそれを解決した、だから『公羊伝』中のあらずもがなの字句の訓詁は、『春秋』の訓釈の役割りを担わされたものではないか、と本書は推測する。興味ある指摘である。ただ、成立が『公

羊伝』よりおくれる『穀梁伝』（二九頁）ではこの種の訓詁はどう処理されているのか、古文の『左伝』ではどうか、といった派生的な疑問が起こる。この疑問を追究した上で本書の推論を吟味する余地はあろう。

「二　俠気と復讐」以下は各論になる。この「二」は「俠気の礼賛ー所引の説話をめぐってー」と「復讐の是認」の二節に分かれるが、それぞれ『日本中国学会報』二四・二六集に「春秋公羊伝における俠気の礼賛ー所引の説話をめぐってー」「復讐の論理と倫理」と題して既に発表されている。前者は『公羊伝』の特色の一つとして好勇任俠の礼賛を取り上げ、伝中の具体例を詳説しつつ「俠」の観念の基本要素が「勇」「信」「義」であることを帰納し、この游俠観が司馬遷のそれに継承されることを主張する。後者も同様に『公羊伝』の復讐の記述を、復讐する者とされる者の関係で四つに分類して調べ、この伝の復讐が対外的な矜持、外づらへの偏執、つまり面子に支えられていること、人格神的な天の考えに基づく「福善禍淫」の期待などないあくまでも人間による報復であること、しかし復讐の倫理もしっかりとおさえていることなどを述べ、更にこの復讐肯定論が漢代でも是認されていることに及ぶ。『公羊伝』の復讐はよく触れられる事柄だが、このように詳細で緻密な論はこれが初めてであろう。又、『公羊伝』の俠気の摘出と分析も、本書のものであろう。

「三　心意の偏重ー行為の評価についてー」は『公羊伝』の動機・心情を重んじる傾向を分析する。『公羊伝』に登場する人物の善きあるいは悪しき意志の発生した時期、強弱の度合い、更にはそれがもたらす結果の何如などにより分類して、「宋襄の仁」を高く評価することに端的に示されるこの伝の姿勢が解明され、悪しき意志を未然に禁絶する態度に及ぶ。そしてこのような善き意志の偏重は、歴史を力こそが動かした時代にあって、この伝の伝義の生成者が斉の僻地のアウトサイダーであったからこそ可能だったのだろう、と説く。とすると、このような『公羊伝』の学が漢代の専制国家において体制に密着する形で最も盛行した理由が問題となる。本書はまず『穀梁伝』と対比させ、その法家的な責任倫理は漢の政治の本質に合するからこそふるわなかったのに反し、『公羊伝』のこの徹底した心情倫理は徳治を標榜するその政治の粉飾に最適だったとし、次に、この伝は教条的な心意の重視だけでなく、「経」「権」、「文」「質」などの二元論も備えて現実を肯定もしている、という。しかし、『公羊伝』と漢代公羊学を明確に区別した上で、いわばアウトサイダーの学が実権派の学となりえた訳は、本書のこの説明ではまだ不十分ではなか

ろうか。『公羊伝』の心情重視とその現実肯定の姿勢との関係はどうなるのか、更には果してこの心情重視を単なる体制批判と見てよいか、といった疑問が出せよう。

「四　人倫道徳」は三節から成るが、「君臣の義」「親親の道」「親親と君臣の交叉」という題が示すように、『公羊伝』における俸禄で結ばれる公の関係、骨肉の繋りである私の関係、そして両者の間の矛盾・対立が説かれる。結論は『公羊伝』が公も私も共に重視したこと、つまり、「親親」の当為を力説しつつ国家（天下）の安定と秩序の確保も強く求めたこと、であると解される。本書はこの公・私の軋轢が儒家にとって免れがたい問題でありながら、この種の分裂・対立を弁証法的に綜合しようとはしないのが儒家の論理らしい、と見るのである。ただ、「親親の道」という言葉は『公羊伝』が初出であり独自のものであって、それにふさわしく血縁に基づく自然の情愛への絶対的な支持がこの伝でなされていることは、本書によって詳しく知ることができる。

「五　経と権―原則と例外―」はまず「大夫の地位」で、『春秋』の時代の大夫は世襲であり政治の実権を握っていたが、『公羊伝』は崇賢主義からこの禄位の世襲である「世卿」を強く排斥し、又、大夫を君主の下に厳格に位置づけようとすることを述べる。次の「遂事の是非」は、大夫の専断を強く否定しながら礼に適う場合と国家の利害にかかわる場合はそれを肯定していることを説き、最後の「経と権」で鄭の祭仲の事例を中心に「権」の概念を分析する。『公羊伝』の支持する「権」は、現実を認めることであり、他方で理念としての「経」を掲げつつしかも現実的な姿勢をとるものである。祭仲が臣下の身で君主の廃位を決めたその「権」を、国家と君主を分離させ国家の利害の前には君主の存在も軽いとする考えから『公羊伝』は肯定するのである。以上の事柄は既に中江丑吉「公羊伝及び公羊学に就いて」（『中国古代政治思想』所収）でもほぼ触れられている。この論文は、『公羊伝』が文王・武王に象徴される周代の王道や宗族的封建制度に深い尊敬をはらうので、それが『春秋』の時代に乱れているさまを批判するが、他方、『公羊伝』の時代の趨勢にも動かされ、しかも動かされながら現実及び未来への見通しを全く示してなく、だからその主張にさまざまな矛盾が現われている、と説く。周代の制度として当然である「世卿」を非難し、大夫専制に極力反対しながら一方で大夫の専行権を主張し、君主を絶対視しながら君主と国家を切り離して国家の方をより重んじている、といったことなどはそれである、とされる。本書はこのような既発表の論を踏まえた上で新しい視点

を探ったものと解される。

「六　特異な夷狄論」は五節から成る。「華夷の相互転位」は『公羊伝』が夷狄を華夏（中国）から峻別して蔑視しながら、孔孟も認める夷狄から華夏への漸進の他に、あえて華夏から夷狄への貶降もありうることを主張し、華夷の相互転位の図式を最初に提起していると述べる。「夷狄の設定」「受容の拒否」は、しかし、『公羊伝』が夷狄の華夏社会への移行を執拗に拒否するさまを楚や呉に対する処遇で見、「熾烈な攘夷」は戦攻侵伐に極めて批判的な『公羊伝』が復讐の他では夷狄の討伐だけを肯定する程、夷狄への憎悪を示していると述べる。以上は部分的には既にいわれてもいる（中江氏前掲論文、小倉芳彦『中国古代政治思想研究』I 4）が、本書の特色は最後の「夷狄存在の意義」にある。ここでは、華夷の相互転位の図式を設定しことさらに華夏の夷狄への下落を強調する理由を考え、これは、侮蔑すべき夷狄への貶降を華夏への警鐘として使ったのであって、漢代の災異説における災異の役割りを夷狄に求めたのであるとする。更に『公羊伝』が「福善禍淫」の根拠としての人格神的な天の観念に乏しいことが再び挙げられる。つまり内に神を持たぬが故に外に悪魔を必要とし、これを夷狄に見たのだ、と説くのである。これは本書における最も興味深い推定である。もちろん、夷狄は災異と異質ではないかとか、悪魔は神と対をなしてこそ存在の意義を持つのではないかといった疑義は直ぐ出せようが、後世の公羊学が太平大同の考えで夷狄を華夏に近づけて解しがちな傾向と『公羊伝』の原思想とに一線を画そうとする特色ある説である。特に悪魔視すると見ることは、中国の思想を考える新しい視点であろう。

「七　文と質ー理念と現実ー」はまず「王道の強調」において、王者（天子）を絶対視する『公羊伝』が諸侯の分際で王者を会盟の場に招いた晋の文公を譏ることから始め、晋文への批判的な評価を指摘し、『公羊伝』は晋文に仮りて覇者のマイナス面を摘出しその非礼や非道への批判を通して「文」、つまり諸侯としての在り方を示し、他方、斉の桓公に託して「実」、つまり覇者への現実的な期待とか肯定面を説くのではないかと推測し、このことを次の「覇者の肯定」で詳しく論証する。もともと、『公羊伝』が王道を高唱しながらも歴史的存在としての周室の再興には全く期待していないことは指摘済である（中江氏前掲論文）が、この節も、『公羊伝』は現実の周王朝を全く無視して明天子が存しないことを前提に立てた上で覇者を認め、その諸侯としては逸脱した行為をも、「文」・理念として

許さないとしながら、「実」・現実的要請をより重視して是認すると説く。覇者の力による変革に「文」・理念を付加してこれを認めるもので、覇者の王者化であり、新たな王者の出現を時代の流れに即して求めるのである、とされる。本書の新たな見解である。

もともと『公羊伝』はその成立の事情から主張に相反する面も出てくるのは当然だが、この伝が一旦、完成して経学の一部を形成すると、相反や対立は許されなくなり、漢代公羊学にしても『公羊伝』をあくまでも一つのまとまった教説の書とする。けれども『公羊伝』そのものの思想を解明しようとする時、この伝への経学的姿勢は意識的に客体化されねばなるまい。本書はこれを目指すと解される。もちろん、漢代以後の公羊学説を参考にする必要も出てくるし、本書でも董仲舒・何休等の説がしばしば引用される。一見、漢代公羊学に基づく解釈かの如き観を呈する個所もある。だが本書は基本的には、後世の解釈を冷静に処理して『公羊伝』の本来の思想に迫ろうとする。かつ本書は、『公羊伝』のいわゆる筆法に関するものも含めた主張の間の矛盾を矛盾のまま放置せず、一貫してこの伝を一つのまとまりとして有機的に解しようとする。いわば漢代以後の公羊学と類似の姿勢にありながら、明確にそれとは異質な客観的な立場から、『公羊伝』を全体的に研究するのである。とはいえ、この伝の決して単直ではない思想を統一的に解明するのは、やはり容易ではないに違いない。

例えば、『公羊伝』はほぼ戦国末の頃に形を整えたのだから、その時代の趨勢を反映していようとまず考えられるし、本書もこの意識を持つことが、「七」などから読み取れる。しかし時代との関係は、『公羊伝』のような書の場合、いろんな意味で把握が困難で、従って本書もやむをえず漠然と大きな時代の流れに応じている、とするだけである。これは、来たる統一帝国の王者の姿を覇者に見る、ということに端的に示されている。けれども『公羊伝』を全体としてとらえる時、それと他の考えとの関係は無視できない。本書は覇者の典型を斉の桓公に見、その覇業に不可欠の一つとして攘夷、特に僖公四年の召陵における楚の服従を挙げ、これが斉桓の覇業の完成とする（召陵の会は楚が大夫を出席させただけだが、特に何休は「知与桓公為天下覇主」として重視し、本書はこれに従うらしい）。しかし、『公羊伝』はここで斉桓を称えながらも、強勢な楚が中国と会盟してくれたことに安堵しているようにも見える。

つまり、秦や呉や楚に代表される強力な夷狄を除却するといいながら、むしろこれと調和を図らねばならぬ状況を認めざるをえず、調和しうる力を持った者として覇者を支持する面も、『公羊伝』に読み取らねばならぬと思われる。それに、これを別にしても、将来の統一帝国を目指すことと、夷狄を包摂せず排除することとは、一致しないのではなかろうか。又、夷狄に郯婁・牟・葛なども含ませることは、道義への関心の強さがやはり窺えよう。そして道義といえば、家族道徳と国家秩序との問題がある。

本書は「四」で結局、肉親への配慮と社会への考慮の両立を『公羊伝』は目指すとまとめる。しかし、「三」「七」で説かれるように、『公羊伝』は個人の道義心を偏重し、倫理を政治に優先させる。この伝では「宋襄の仁」に示されるように、個人倫理の前に国君としての責務、国家への配慮は軽んぜられるのである。又、「五」でも大夫専制の是認される場合の一つとして、喪中にある敵への攻撃を行なわず君命を廃することがいわれるが、これも「宋襄の仁」と同質の考えから出ている。だから家族と国家が対立した時には、国家よりも「親親の道」に立って家族を重視するのが、『公羊伝』の根本的な態度ではなかろうか。とすると、統一体制下では国家が家族を包摂する形、家族道徳は国家秩序に調和させられる構造でしか、両者の矛盾・衝突は解消されまいから、『公羊伝』は来たるべき統一体制への動きに逆らうものになりかねまい。もちろん『公羊伝』も当時の社会のありさまからその安定を求めたに違いないが、それが秦漢帝国のような新しい専制体制を志向することによっている、と簡単に見てよいかどうかは疑問であろう（『公羊伝』は経学となる素地は有していたが、経学とならねばならぬ必然は、別の問題だろう）。尚、『公羊伝』と対比されて『穀梁伝』が本書で触れられ、それが責任倫理を唱えて統一国家体制に敏感だ（一四二頁）とか、家族道徳より国家の秩序を重んじる（一九〇頁）とか、法家的色彩が強烈（一九二頁）とか説かれる。これは本書の著者が師説を継承発展させた結果の見解に基づくものだろうが、疑義は起こりえよう。

つまり、『公羊伝』のような書の思想は、個別的にその特質を解明するのは比較的容易であるが、その特質の間の関係を論理的に把握するのは、依然として難しいのである。

ところで時代との関係を考えるなら、時代に生きた実質的な著者達、戦国期を生きた『公羊伝』伝義の生成者達との関係を探ることも必要になろう。もちろんこれも困難な問題で、本書も「三」で彼等がアウトサイダーだったから

非現実的な批判を徹底しえたのだろう、と述べる程度で終っている。当然であろう。ただ、「五」でいわれる『公羊伝』の崇賢主義は、やはりこの伝の実質的な著者達の自己主張と関連していないだろうか。そうだとすれば、大夫の専制やその「権」の行為などに対しても、『公羊伝』の伝義の生成者達の属する階層の社会的役割りの増大と経学としての公羊学への展開との関係、などといった別の観点も出てくるのではないかと思われる。尚、『公羊伝』が賢とたたえるのが実力主義で登用された大夫ではなく世襲の大夫である（二〇一・二頁）としても、戦国期の者にとってはその大夫が君に対する臣であるだけで足りることではなかろうか。

さて、本書では各処で漢代の説が援引される。『公羊伝』の理解の為に時代的に最も近い漢代の考え方が有用で、これを参考にするのは妥当だが、安易にそれがなされると、『公羊伝』本来のものを越えないだろうか。

本書は「古人之有権者、祭仲之権、是也」（桓公一一年）の「古人」は殷の名相伊尹で伊尹を用いて祭仲を賛美した（二一九頁）とし、「悪有言人之国賢若此者乎」（昭公三一年）を叔術を称えたもの（二四六頁）とする。いずれも何休注と同じで、本書は何注に従ったのに違いない。けれども、前者の「古人」はつまりは祭仲のことに過ぎぬのではなかろうか。後者は道義的に納得し難い行動もする叔術への疑問の言葉と解せないだろうか。何休は『公羊伝』以上に祭仲と叔術の行為を評価すると思われる。

又、本書は例えば成公四年の「鄭伯伐許」という経文を問題とし、鄭の悼公は同年に先君の葬儀があったのに戦伐を行なって鄭伯の地位に即いたのを喜んだので、喪中だから「鄭子」と記すべきところを「鄭伯」とその意志の通りに書し痛烈に非難した（一〇五・六頁）という。しかるにこの条には『公羊伝』は伝文を全く付してないのである。そして本書はもっぱら董仲舒・何休の説を引いて解説する。漢代ではこれは問題とされており、許慎の『五経異義』にもこのような公羊説とそれに対立する左氏説が収められている。つまり、本書は漢代公羊学説にそのまま依拠して、これを『公羊伝』の説とすると解される。宣公一一年の経に「楚人殺陳夏徵舒」とあり、続けて「丁亥、楚子入陳」とある。前者に対し『公羊伝』は、「楚人。」と記したのは諸侯の専討を許さぬことを示すが、実際は楚は義兵を挙げたのだからこれを肯定し、「実与して文与さず」だとする。本書も前者は賊を討ったことを顕彰したとするが、後者は、何休注・徐彦疏に従って「丁亥」と日を記して鄭の荘王の領土的野心を非難した、つまり楚の荘王が初めは善き

意志を持っていたが中途から邪心を起こしたことを貶絶した（一一一・二頁）とする。しかし、前者の「楚人」に対し後者の「楚子」は最も尊んだ呼び方（二三七頁）で、これを、次には陳の大夫を陳に納めた荘王の善き行為（「丁亥、楚子入陳」の次の経文は「納公孫甯儀行父于陳」）の故とするのは、あくまでも何休の解釈である。本書は注・疏に依存してそれを『公羊伝』の考えだとすると思われる。

更に本書の「二」で取り上げられる「俠気」は、『史記』游俠列伝と重ね合わせ過ぎた嫌いが感じられる。漢初の任俠の風に関する史学での成果も本書は意識しているのだろう。しかし、『公羊伝』の復讐論にひきずられることなく眺めたら、この伝の「俠気」の他書に比しての特異性は、よく理解し難い。それに、『公羊伝』の熾烈と評される攘夷思想と、呉・越・楚・秦などの夷狄の始祖を華夏の古帝王から出自したとする『史記』の姿勢とは合致しないように、司馬遷が公羊説を踏襲したとだけ簡単に見てよいか、といった疑問も逆に出せよう。

以上、幾つかの事柄に触れたが、それらはあくまでも疑問点であって、それらによって本書の挙げた成果は左右されまい。本書は『公羊伝』に人格神的な天の観念の稀薄なことで復讐の他に夷狄をも考えたり、「経」「権」の他に「文」「質」でも建前・本音の論を検討したりして、『公羊伝』を精密に解剖・分析した上で立体的・有機的に解釈しようとした。そのような特色ある論究を展開しながら、他方では、既発表の研究を踏まえて妥当な説も呈示し、自己の新知見には慎重な態度を崩さない。だから序論から各論の最後に至る迄、破格の論は目立たず全体として穏当な論調になっている、といった感も一面では与えられる。元来、『公羊伝』の個々の問題についての研究論文は少なくないが、その全体を取り扱った専著はほとんど見られない現況の中で、本書は貴重な存在である。われわれは本書により『公羊伝』の全体像と特質を知りうるのである。

中国古代思想研究の分野における一収穫である本書に対し、この書評は、執筆者の浅学の故に、精確な理解と正当な評価を示しえなかった個所や、誤った判断をした部分が少なくないのではないか、と危惧する。著者の御寛容をお願いする次第である。（一九七六・七・七）

昭和五一年三月　創文社発行
三一四頁　定価四五〇〇円